ライフスタイルの確立に関わる小児期の心理発達的要因の検討
－子どものパーソナリティと生活習慣－

（分担研究：健康的なライフスタイルの確立に関する研究）

大　石　　昂（富山大学）

要約：小児期からの健康的なライフスタイルの形成において、心理発達的な要因を考慮することはきわめて重要である。本研究においては、「第2回富山スタディ」の調査結果に基づいて、パーソナリティと食生活、生活習慣との関連について検討を行った。

見出し語：パーソナリティ、富山スタディ、生活習慣

はじめに

富山県内の小学1年生を対象とした「生活習慣アンケート」の調査結果について、パーソナリティに関する4つの質問項目を中心に生活習慣との関連の検討を行った。

方法

平成7年6月から7月にかけて第2回富山スタディ調査を、県内の小学1年生の生活習慣等に関して、家族の記入による委託調査形式で実施した。本研究では、この調査結果のパーソナリティに関する質問項目の分析を行い、さらに生活習慣に関する他の項目との相関分析を行った。

分析の対象となった調査票は8419で内訳は表－1のとおりである。

	度数	%
男	4302	51.1
女	4117	48.9
合計	8419	100.0

表－1

結果と考察

まず、パーソナリティに関する下記の質問項目について因子分析を行った。

30、物事に熱中しやすい方ですか。

31、気分の変化が激しい方ですか。

32、負けず嫌いの方ですか。

33、社交的な方ですか。

34、物事を自分から進んでする方ですか。

主成分分析の結果、2つの因子が抽出された。

*富山大学生涯学習教育研究センター　(Center for Education and Research of Lifelong Learning TOYAMA UNIVERSITY)

Factor Matrix:

	Factor1	Factor2
30	.55668	-.04924
31	.11083	.89262
32	.64887	.47038
33	.70921	-.26369
34	.80734	-.23499

表－2　成分行列

（因子抽出法：主成分分析）

第1因子は、行動面、社会面において積極的、活動的なパーソナリティに関連しており、「積極的活動性」と名づけることができよう。

第2因子は、気分の変化の激しさを示しており、「気分易変性」と名づける。

なお競争性は、この両方の因子に関連しており、単一の因子としては抽出されなかった。

次にこれらのパーソナリティに関する質問項目と生活習慣、食生活との関係を相関によって検討した。

食生活については、朝食を毎日摂るかどうか(質問項目4)、間食の回数(質問項目12)、夜食の回数(質問項目15)のどれとも相関が見られなかった。

生活習慣との関連では、一日の平均テレビ視聴時間(質問項目29)との相関は見られなかった。しかし運動や外遊びに関する項目(26, 27)との間に表-3に示すような弱い相関が認められた。社交性や積極性に関する項目との間に相関が見られたことから、子どもの外遊びには積極的活動性や友人関係が関連していることが推測される。

	30	31	33	34
26 運動好き	.08 p=.00	.01 p=.20	.23 p=.00	.22 p=.00
27 運動する	.07 p=.00	.02 p=.08	.20 p=.00	.19 p=.00

表-3　運動・外遊びとの相関係数

テレビの視聴時間(質問項目29)については、平日、休日のどちらとも相関は認められなかった。

検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用
論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります

要約:小児期からの健康的なライフスタイルの形成において、心理発達的な要因を考慮することはきわめて重要である。本研究においては、「第 2 回富山スタディ」の調査結果に基づいて、パーソナリティと食生活、生活習慣との関連について検討を行った。